

優秀賞

私が怒られた理由

松江市立義務教育学校玉湯学園 9年 長谷川あまね

私の家は、私と両親、姉一人、妹二人、祖母、おじで暮らしています。今回は、おじとの関わりを通して考えたことについて話します。

私のおじは、生まれつき障がいをもっています。今は、「まがたま」という障がい者施設に通っています。あまり人と話さず独り言を言っていることが多いです。お風呂も一人で入れません。だから父が毎日入れています。おじには決まりごとがあります。例えば、お気に入りの椅子があり、その椅子に必ず座ることや、施設から帰ってきたら、必ずコーヒーを飲むことです。コーヒーの準備をするのは祖母ですが忘れていると、五回も六回も、

「コーヒーは？」

と聞きます。普通だったら同じことを何回も聞かれたら、イライラするし、怒るかもしれません。でも祖母は、何回聞かれても、

「今、準備するから待ってて」

と怒ることなく答えます。また、障がいをもっている人だからといって差別をせず、私たちと同じように接しています。そんな姿を小さいときからずっと見ていて障がいをもっている人に対して考え方が変わりました。

これは、小学校一年生のときです。私は当時生きていた祖父に「本を読んで」と頼みました。祖父は、「いいよ。」と言い、

「じゃあ、座ろっか。」

と言いました。その座ろうと言った椅子は、おじの椅子でした。そこで私は、

「やだ。きたない。」

と言い、おじの椅子に座ることを嫌がりました。すると祖父はものすごく私を怒りました。当時の私は大泣きしてなんで怒られたのかも分かりませんでした。何年経ってもその出来事を忘れることはありませんでした。

おじは、ご飯を食べることが上手ではないので、口や服に食べ物がついてしまいます。手がよごれていても、声をかけないとずっとそのままのことが多いので、そのような行動に対して私は、きたないと思っていました。おじのお気に入りの椅子に触りたくなかった私に祖父が座ろうと言ったので嫌がりました。私はその時のことを振り返って、おじに対して私の中には、「おじはきたない」という偏見や差別の心があったのだと思います。祖父に怒られたのも、そのような心をもって家族に

対して差別をしてしまったためだと思います。

今、世の中では、差別に苦しんでいる人がたくさんいます。例えば、みなさんは、二〇一六年七月二十六日神奈川県知的障がい者福祉施設、津久井やまゆり園で起きた事件を覚えていますか。この事件では四十五人の障がいのある人たちが被害にあいました。犯人は、

「意思疎通の出来ない重度の障がい者は、不幸かつ社会に不要な存在であるため、重度障がい者を安楽死させれば世界平和につながる。」

という動機でこの事件を起こしました。この事件も、障がいをもっている人は、なにも出来ない不要な存在という偏見や差別の心があったのだと思います。

差別はなぜ起こるのでしょうか。津久井やまゆり園のような大きな事件もありましたが、小さかったころの私の中にも差別の心がありました。自分と違うことに対する否定や、身勝手な思いこみなどといった小さなことから差別が生まれると思います。自分と他人の違いを認め合うことが大切だと思います。

私は、「知らない」ということが、思いこみや勝手な解釈による偏見を生み、「自分との違いを認められない」ということで差別の心が生まれると思います。この心は簡単になくせるものではありません。なくすための一歩として、コミュニケーションが大切だと思います。私は障がい者施設のお祭りに参加したり、おじに積極的に話しかけるようにしています。そうしているうちに、おじのちょっとした変化や表情に気づくようになりました。最近では、声を出して笑ってくれたり、問いかけに返してくれるようになりました。また、小さかった私の中にもあったように、誰しもが差別の心をもっている可能性があります。そのことを常に考えて、行動しないと差別に気づくことができません。つまり、相手を知り、違いを認め、自分の心の中にも差別の心があるかもしれないと思って発言や行動をすることが大切なのだと思います。